
奈々子の探偵物語

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奈々子の探偵物語

【Nコード】

N2324C

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

ひよんな事からもう一人の自分の為に探偵学園に入学する事になつてしまった主人公の櫻井奈々子。彼女はこれからどんな探偵活動を行うのか？——不定期更新・・・誰か、売り上げの何割かを支払う条件d（ry

Episode 1 入学式（前書き）

名前は同じだが、「二つの魂シリーズ」とは別物です。ご理解の方、
お願い致します。

Episode 1・入学式

東京都練馬区、江戸川探偵学園——通称・EDS。この学園は、探偵を目指す者が通う、都内でも有名な私立の専門学校である。

今日は、その学園の入学式。先程から、沢山の新生達が校門を潜っている。

その門の前で、

「これがEDSか」

と、門の向こうに見える校舎を見上げている、つり目で髪の長い少女は、名を櫻井 奈々子。そしてその横にいるのは、円らな瞳で髪の長い少女。身長は奈々子より数センチ低い。

この少女、目を凝らして見ると、何処か変だ。なんと、着ている服を含め、全身が半透明なのである。その証拠に、少女の体を平気ですり抜けていく人物が何人もいる。幽霊なのか？

「到頭来ちゃったか」

そう言って、幽霊らしき少女は、奈々子の見上げた。

すると奈々子はその少女を見下ろし、

「あんたが夜遅くまで勉強して朝寝坊したからだろ？」

「だからって勝手に入れ替わらなくても良いじゃない！て言つか起こしてよ！？」

「嫌だね、私はこの学校に来たかったんだ」

（推理オタク）

「悪かったな、推理オタクで。あんたの考えてる事くらい解るぞ。同じ体を共有してるんだからな」

奈々子はそう言って、校門を潜り去って行った。

Episode 1・入学式（後書き）

遊戯王（武藤^{むとう} 遊戯）みたいだと思った人、素直に感想ね。

Episode 2・適正試験

午前9時——体育館には、大勢の生徒が集まっていた。これから入学式を行う為だ。

その入学式を行う体育館の壇上には、髭を生やした痩せ細ったお爺さんがマイクに向かって喋っている。

「入学生諸君、私が本学園の理事長兼学園長の江戸川 えとがわ 総一である。これから、本学園の入学式を始める・・・と言っても、本学園で行う入学式は、普通の学校で行う入学式とは違い、諸君の探偵としての知識を試す、言わば試験の様な物である。

さて、今私が立っている後ろに、一枚の大きなモニターがある・・・。これには、これから出題される問題が写る様になっている」

園長がそう言うと、そのモニターに一枚の写真が映し出された。それは、ある部屋で男性が首を吊っており、現場は酷く荒らされている物であった。

「見ての通り、これは男が首を吊って亡くなっている現場を写した写真だ。この写真に、おかしな点が一つだけある。そのおかしな点を、諸君に見付けて答えて頂きたい。制限時間は10分。その間、周囲の方達と相談しても構わない。では、10分後に解答を聞く」

園長が言い終わると、奈々子は円らな瞳の少女に小声で囁いた。「私は暫く考えるから入れ替わるぞ」

そう言うと、奈々子の体は数センチ縮み、つり目は円らな瞳へと変わった。

「って、勝手に変わらないでよ！」

円らな瞳の少女、奈々子が叫ぶと、周囲の人々が自分に注目した。「皆が見てるぞ」

つり目の奈々子は、そう言って姿を消した。

「えっ!？」

円らな瞳の奈々子は、辺りを見回した。皆、自分を見つめている。

（何やってんだろ、私ったら・・・）

と、その時、一人の少年が奈々子に声を掛けて来た。

「君、あの爺さんの言うくおかしな点>って解った？」

その言葉に、奈々子は驚いた。

「あ、ゴメン、推理してたの？脅かすつもりは無かったんだ。ホントにゴメン」

この男、名を工藤^{くどう} 健一^{けんいち}。後に、奈々子のパートナーとなる男である。

「いや、こっちこそ驚いてごめんなさい。おかしな点、まだ解らないわ」

それはそうだ。考えるのはつり目の奈々子であって、今の奈々子では無いのだから。

「そうか、じゃあ、俺と一緒に考えようよ」

「うーん・・・解った」

とは言うものの、あまり乗り気では無い。

「所で、俺は工藤 健一。君の名前は？」

「櫻井 奈々子です」

「奈々子ちゃんか、可愛い名前だね」

その言葉に、奈々子は顔を赤くした。

「どしたの？」

「いえ、名前誉められたの、初めてだったから・・・」

「そっか。それはそうと、おかしな点考えようよ」

「そだね」

そう言つと、奈々子の身長が突然伸び、円らな瞳はつり目に変わった。しかし、健一はその変貌振りに全く気付いていない。

「あつ、急に交代しないでよ！」

円らな瞳の奈々子はそう言つが、つり目の奈々子は無視した。

「工藤君、あの写真よく観て」

「えっ？」

健一は、壇上のモニターを観た。

「遺体の周りを見て何か気付くか？」

「いや、何も・・・」

「もつと注意深く見ろよ。あそこにはある筈の物が無えんだ」

「ある筈の物？」

健一は目を凝らし、注意深く写真を見つめた。

「あつ、椅子が無い！」

「そう、あの現場には台に使った椅子が無い。そして部屋の荒れ様・
・これはどう考えても自殺は有り得ない。つまり、他殺って事だよ、ワトソン君」

「へえ」

この時、奈々子は思った。

（こいつ、ホントに探偵目指す気あるのか？）

「10分経った。今からモニターに3択の答えを表示する」

園長が言つと、モニターに番号が現れた。左から1、2、3の順番だ。

「1番、自殺。2番、他殺。3番、事故。この中から、自分がこれだと思う物を選び、後ろで番号の旗を持っている先生の前に立って頂きたい。失格者にはその場で帰宅して貰う」

「適正試験・・・って訳か」

奈々子は呟いた。

「工藤君、2番の旗の前に並ぶぜ！」

奈々子はそう言つと、健一と共に2番の旗の前に並んだ。他にも、数十人程がそこに並ぶ。そして、正解発表の時が来た。

「正解は・・・2番の他殺だ。他の旗の前に並んだ者は退場！」

すると、残念だったとか、やっぱそつちかとか、呟きながら2番以外は退場して行つた。

「諸君、前を向いて頂きたい」

奈々子と健一は、壇上の方を向いた。そこには、四人の男女がいた。

左から手首に包帯を巻いた女性、足を骨折した男、頭に包帯をし

た男、杖を着いた老婆の順に並んでいる。

「最後の試験だ。この中に、先刻見せた写真の被害者を殺害した犯人がある。これからその犯人を考え、犯人の後をつけて頂きたい。検討を祈る」

園長はそう言つと、壇上を降りて行つた。

「さて工藤君、犯人は一体誰でしょう？」

奈々子はそう言つて、不適に微笑んだ。

「うーん、老婆はじゃ無理だし、足を骨折してるのも無理。だとすると残るは、手首に包帯巻いた女性と頭に包帯巻いた男性だよなあ．．．」

健一は暫く考えると、頭に包帯を巻いた男を選んだ。

「どうしてそう思うんだ？」

「だって、手首に包帯巻いてるって事は、捻挫をしている訳だ。そんな手で、男の首を絞めて吊るなんて難しいだろ」

「そう思つか？」

「えっ？」

「あなたの推理は甘いぜ。良いか、あの女性が何時怪我をしたのかを考えるんだ」

「何時つて．．．まさか!？」

「そう、あの女性は男を吊る以前から怪我をしていたのでは無く、男を吊り上げた時に怪我をしたんだ。それとも一つ、頭に包帯を巻いた男だったら、逆に殺されて終わりだ。見て判る通り、あの現場は荒れている。どう見ても、争つた形跡のあつた証拠だ。それに現場にはビール瓶が落ちている。あんな物で頭を殴られたら、頭を負傷しているんだ、即死するに決まっている。だから、犯人は手首に包帯を巻いたあの女性だ」

「成る程、そう言う事か」

「そう言う事だ、奴を追うぞ!」

健一は頷いた。そして、二人でその女性の後を追つた。

Episode 3・詐欺喫茶店

女性の後を付けて十数分。奈々子達は駅にやって来た。

「やべえな、見失ったぞ?」

と、奈々子は健一を睨み付けた。

「つたく、あんたがもたもたしてつからいけねえんだ!」

「そんな事言ったって、奈々子ちゃん足早いんだもん」

「あの女が走ったんだからしょうがねえだろ」

「でも・・・」

「ああ、もう良い。何処かでコーヒーでも飲もうぜ」

奈々子はそう言っていると、辺りを見回した。そして、喫茶店を見付け、そこへ入って行った。

「いらっしやいませ」

店員・・・否、マスターは笑顔で頭を下げた。

「マスター、コーヒーお願い」

そう言って奈々子は空いている席に座った。

マスターが注文の品を作りながら聞いた。

「お嬢ちゃん、学生さんだね。学校はどうしたんだい?」

「色々あってね、抜けて来た」

「要するにサボりつて事だね?」

「まあ、そんなところかな」

マスターとそんな事で盛り上がっていると、健一が入って来た。

「遅いぞ」

「ごめん・・・」

そう謝ると、健一は奈々子の隣の席に座った。

「マスター、俺もコーヒーを」

マスターは微笑して、これかいと小指を突き立てた。

「「違え!」」

二人の声がハモった。

二人は一瞬、顔を合わせると、直ぐに戻した。

「はい、コーヒーどうぞ」

と、マスター。

奈々子は、出来立てのコーヒーを一口飲んだ。

「マスター、このコーヒー、スーパーのだろ」

ギクツ！——マスターは焦った。

「確か、赤羽の前にある東。ストアだった様な・・・」

「な、何を言ってるんだい君は？冗談はよしてくれよ」

マスターは更に焦った。

「200円で買える物を、600円で売って良いの？それって詐欺じゃないか？」

「奈々子ちゃん、からかうのはよせって」

「別にからかつて無えよ」

すると、他の男性客が、

「何だこれは！？」

と、飲んでいたコーヒーをぶち撒けた。

「マスター、このコーヒー東。ストアの200円の奴だろ！あんたこんな物を600円で売ってるのか！納得いかねえ！」

男はそう言つて席を立ち、怒つて店を出て行ってしまった。

チャリン——店のバーに、男の投げたお金が載った。

健一は、驚いた様子で、男が出て行ったドアを見つめていた。

「マスター？」

奈々子は微笑した。そのつり目が恐ろしく怖い。

「せ、背に腹は代えられん。値下げするよ」

「いくらに？」

「300円」

「・・・・・・」

「200円」

奈々子は首を振った。勿論、横にだ。

「100円。これより安くは出来ない」

「O・K・」

そう言つと、奈々子は再び、コーヒーを一口飲んだ。

喉がゴクツと鳴り、液体が胃に達する。

「工藤君、何時までそうしてる気？」

奈々子はそう言つて、入り口の方を向いて驚いた顔で固まつてる健一の背中をつついた。

「あ、ごめん」

健一は我に返ると、前に向き直つてコーヒーを飲んだ。

「ねえ、これからどうする？」

「うーん、女性には逃げられたし、特にやる事も無いから、ゲーセンでも行こうか？」

そう言つて、奈々子はコーヒーを一気に飲み干し、１００円玉をバーに置いて出て行つた。

「あつ、待つてよ！」

健一も、コーヒーを一気に飲み干し、出て行こうとすると、

「お客さん、お金！」

「あつ、いくら？」

「１０００円」

「高・・・って、何であの娘だけ１００円で俺が１０００円？」

「あの娘は特別だ」

この時、健一は思った。

（こいつ、絶対詐欺以外にも何かしてそう）

「ほら、１０００円やるよ」

健一は１００円玉を１０枚、投げてバーの上に載せて出て行つた。

その後、この喫茶店が潰れたの言うまでも無い。

Episode 3 詐欺喫茶店（後書き）

次回はゲーセンで殺人。

Episode 4 ゲームセンター殺人事件

奈々子と健一は、駅前のゲームセンターにやって来た。中には色んなゲームが並んでいる。

「工藤君は得意なゲームあるのか？」

「えっ、俺の得意なゲーム？レーシングゲームかな」

「じゃあこれやろうぜ」

奈々子はそう言っで、偶々近くにあった、側面に。文字Dと書かれた箱の前のハンドル付きの椅子に座った。

「。文字Dか。俺好きなんだよこれ」

「工藤君、バトルだ！」

「おう！」

すると、女性の甲高い悲鳴が聞こえて来た。

「キヤアーツ！」

と言う悲鳴が・・・。

「行ってみる？」

健一が訊ねると、奈々子は躊躇う様子もなく頷いた。

「あっちだ！」

二人は椅子から降りると、悲鳴の下へ向かった。そして辿り着いたのは、Staff onlyと書かれた扉の前だ。悲鳴は、この向こうから聞こえて来た様だ。

「入るぜ」

と、扉を開けて中に入る奈々子。それに続いて、健一が扉を抜けた。

その先には、全身を真っ赤に染め、胸に包丁が突き刺さった男と腰を抜かした女性がいた。

奈々子は女性の横を通過し、男性の手首に触れると脈を確認した。

「工藤君、警察」

「解った」

そう言って携帯を取り出すと、健一は110番通報をした。

それから暫くして、警察が駆け付けて来た。

「警視庁捜査一課の橘^{たちばな}だ。遺体には誰も触れてないな？」

そう言って、警察手帳を見せびらかしている20代半ばの若い男は、警部補の橘^{たちばな} 辰徳だ。

健一はその辰徳に、

「あの娘触ってますよ？」

と、奈々子を指差して言った。

「コルアツ、勝手に遺体に触るな！」

辰徳はそう言って、猫を持ち上げるかのごとく、奈々子の襟を掴んで持ち上げた。

「わっ、誰だ!？」

奈々子は振り向いた。

「あつ、橘のオッサン！」

「誰がオッサンじゃい!？・・・って、何故に私の名を知ってる？」

辰徳は不思議そうな顔を見ると、奈々子を放した。

「私だよ、見て解らねえか？」

「いや・・・」

辰徳は首を横に振った。

「櫻井 奈々子、櫻井^{なづけ} 健助の妹だ」

「櫻井 健助・・・四五年前^{しごねん}に何者かに殺害された名探偵だ。私も何度か会った事がある・・・って、あんた彼の妹か！」

「そうだ」

「おうおう、あの頃と比べて随分と大きくなったじゃねえか」

そう言って、辰徳は奈々子の頭を撫でた。

「撫でるなよ」

「良いじゃねえか、久しぶりなんだしよ・・・って、あんた今遺体触ってただろ!？」

「ああ、触ってたが、それがどうした？」

「馬鹿野郎、死亡推定時刻がずれたりでもしたらどうするんだ!？」

「死亡推定時刻は体温から割り出して今から30分前の10時45分頃。凶器が胸に刺さり、心臓まで達して損傷を受けたのが死因だ」
この時、辰徳は思った。
（何なんだこいつ？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2324c/>

奈々子の探偵物語

2010年10月8日14時54分発行